

## ビスケットに込められた思いを胸に

沖縄県立向陽高等学校一年 城間 一華

「お姉ちゃん。今日は、ウートートーする日だね。おばあちゃんのところに行こう。」

毎年、私たち姉弟は六月二十三日の慰霊の日になると祖母の家へ行き、仏壇にウートートーをします。これが小学校の頃から続けている私の慰霊の日の過ごし方です。私が小学校の頃、沖縄戦で祖母が大ケガをしたと聞いていたので、興味本位で

「おばあちゃん傷を見せて。」

と頼んで見ましたが、

「こんな汚いものは見せられないよ。」

と断られてしまいました。その時の祖母の表情は陰しく私を遠ざけるように、よそよそしい態度でした。普段の明るくニコニコしている祖母の意外な態度に少し驚いた私は、祖母に傷の話をしたことを後悔しました。それ以来、何も聞けずモヤモヤした気持ちで何年も過ごしていました。しかし先日、祖母が腰を痛め入院したのです。今年八十四歳になる祖母が元気なうちに祖母の戦争体験を詳しく聞いておくべきではないかと思っただけは、恐る恐る祖母にこう切り出しました。

「おばあちゃんがいなくなると戦争で受けた傷や苦しみを誰も分からなくなってしまう。だから詳しく教えてほしい。戦争は二度と起こしてはならないと訴え続けるためにも、私がおばあちゃんの記憶を弟や次の世代に語り継いでいきたい。」

すると、祖母は黙ってズボンの裾をめくり、傷跡を私に見せてくれました。傷は想像していたよりも大きく、両方の太もも全体に広がっていました。特に左側の太ももの外側の肉は削がれ痛々しいものでした。そして祖母はゆっくりと戦時中の記憶を話し始めました。

「一九四五年六月、沖縄本島南部地域で住民の多くが戦闘に巻き込まれた地獄のような南部戦線の中、生き抜いた豊見城村出身の私（当時五歳）は、家族八人で糸満市真栄平へ向かう途中、悲惨な光景を沢山見た。赤ちゃんをおぶった女性の体が爆弾で吹き飛ばされ、大ケガをした赤ちゃんがギャーと悲鳴を上げていた。道にはバラバラの死体が沢山転がって

いた。戦闘は激しくなる一方で、進むのを諦め自宅近くの日本兵が撤退した後、防空壕へ逃げ込んだ。その壕でアメリカ兵に見つかり『デテコイ』と言われたが怖くて出られなかった。するとアメリカ兵に手榴弾を投げ込まれた。他の家族は捕虜になり、私と一番下の弟は重症だったので、宜野座にあったアメリカ軍病院へ送られた。左の太ももを大やけどしていたから右の太ももから皮膚をはがして移植し、両方に傷が残ってしまった。昔は衛生状態も悪かったから傷口が膿んでしまい臭いしウジが湧いて傷の治りも遅くて大変だった。こんな苦しい思いをするくらいなら死んだ方が良かったと何度も思ったよ。弟は一歳でまだ乳飲み子だった。顔と体の右側に大やけどを負っていて右側の眼は潰れて口から栄養を取れる状態ではなかった。隣に寝ていたから弟がどんどん弱っていく様子が分かって辛かった。お腹だけパンパンに大きく膨らんで手足をパタパタしている姿は蛙みたいだったよ。泣く力もなくて時々『ぐえっ』と声を出していた。一週間もしないうちに栄養失調で亡くなってしまった……。」

私に戦争体験を語った夜、祖母は弟の最期の姿や泣き声が脳裏から離れず夜中に起きて涙が止まらなくなったそうです。私は祖母の辛い記憶を呼び起こして苦しめてしまったと強く自責の念に駆られました。祖母にその話をすると、

「今まで思い出すのが辛くて可哀そうな弟のことも誰にも話せなかった。一華が思い切って聞いてくれてなんだか心が楽になったよ。戦争さえなければ弟はお嫁さんを迎えて幸せに暮らしていたはず、そう思うと悔しくてたまらない。戦争に殺された無念な弟のことを忘れないよう語り継いでほしい。本当は毎年弟の名前が刻まれている平和の礎に行つて赤ちゃん用のビスケットをお供えしたいけれど辛くて行けない。」

「弟は物のない時代に生まれたがビスケットは分かるはず」と祖母が教えてくれたので私はビスケットを持って慰霊の日には平和の礎に行く予定です。祖母の代わりに祖母の弟、私の大叔父に伝えたいと思います。七十八年の長い月日が経つても祖母はあなたを思い続けていること、可愛いあなたが生まれて三人の姉達がとてもあなたを大切にしていたこと、そして愛する者達が引き裂かれる戦争というものを二度と起こさない、ということ。

私は祖母の代わりに祖母の辛い経験を子や孫に伝えていきたい。祖母から受け継いだ大事な大事なビスケットに込めた思いをこれからも子や孫の世代に受け継いでいく。それが私の使命だ。